

「三種の神器」(電化製品)と自動炊飯機

昭和30年代、「白黒テレビ」・「電気洗濯機」・「電気冷蔵庫」という3種類の家庭電化製品を、歴代天皇に伝えられた宝物になぞらえて「三種の神器」とよびました。これらは、庶民にとって簡単には手の届かないあこがれの商品であり、新しい生活の象徴でもありました。生活の根本にかかわる道具の電化は、快適な生活を生み出すとともに、家の構造・家族の構成・女性の役割等々、家庭での生活に大きな変化をもたらしました。それはまた、地域社会や社会全体の変化にも多大な影響をあたえました。この「三種の神器」は、今では当たり前となった家電製品に囲まれた現代生活の原点を思い返すには欠かせない、貴重な資料といえます。

ひとまとめに「三種の神器」と総称されてはいますが、それぞれが普及した時期や普及の速度には差があります。その差を比べると、当時の日本の家庭で何が求められていたかがより明確に浮かび上がってきます。例えば、三種のうちで最も早い時期から売れ始めたのは「電気洗濯機」でした。内閣府の統計によると昭和30年には約10%の家庭で所有していました。同時点で「白黒テレビ」は約3%、「電気冷蔵庫」は約1%にしか達していません。主婦にとって最も厳しい労働といわれたタライと洗濯板の作業からの解放が、いかに望まれていたかがわかります。また、最も短期間で急激に普及が進んだのが「白黒テレビ」です。昭和33年での所有率は20%に達していませんでしたが、昭和34年からは年々10%を大きく超える伸び率を続け、昭和40年には約90%の家庭で所有しており、テレビは家庭生活に欠かせないものになりました。昭和34年の当時の皇太子御成婚や昭和39年の東京オリンピックのテレビ放送が大きな要因になったといわれますが、高度経済成長期における生活の余裕の現れであることは確かです。テレビの普及により、伝達される情報の量は格段に増加しましたが、家族の目はテレビに向くことが多くなり、囲炉裏やちゃぶ台に集まり互いの顔を見て過ごす時間は確実に減少していったのです。



「電気洗濯機」
日立製作所製
昭和32年製造
販売価格 23,000円



「白黒テレビ」
早川電気製
昭和35年製造
販売価格 58,000円



「電気冷蔵庫」
日立製作所製
昭和32年製造
販売価格 62,500円

一方、「三種の神器」とは別に、日本の家庭生活に大きな変化をもたらした電化製品が昭和30年に売り出されました。自動炊飯機です。日本人が米を食べ始めてから2千年以上の時間を経て、初めて直接火を用いることなく米を炊くことができるようになったのです。まさに“食の革命”“台所革命”といえる大きな進歩でした。

昭和30年に自動炊飯機の第1号機である自動式電気釜 ER-4(6合炊)・ER-5(1升炊)が東芝から売り出され、昭和32年には月産1万台を記録し、日本全国の家庭の半分に行き渡る大ヒット商品となりました。「三種の神器」の中に含まれなかったのは、あこがれではなく必需品として普及していったことを示しており、「三種の神器」より以上に生活の近代化に重要な意味を持っていたといえるのです。

その自動炊飯機の第1号機は、茨城県出身者の努力により生み出されました。開発者である三並義忠氏の妻風美子氏は常陸大宮市の出身です。開発は、「はじめチョロチョロ、中パツパ、赤子泣いても蓋とるな」といわれた日本の伝統的飯炊き技術をデータ化することから始められ、炊飯時の温度を1分ごとに測定する実験が繰り返し行われました。実験は、妻の風美子氏が担当しました。1日20回の飯炊き、10時間以上に及ぶ実験を数ヶ月繰り返し、重要なデータが集められました。飯炊きに最適な温度と時間の把握以外にも、自動的にスイッチを切る技術、外気温が低いところでも炊ける技術等の問題を解決するため、家を抵当に入れて実験用のヤミ米を入手するなど、全財産をかけての実験が継続されました。自動炊飯機は他の家電製品とは違い、先行する外国製品を参考にすることができませんでした。そのため、3年に及ぶ開発実験の繰り返しは、経済的にも身体的にも相当な負担となり、その開発を支えた風美子氏は実験の疲れから体調を崩し、昭和34年、45歳の若さで永眠することになってしまいました。

今では大変貴重な資料である自動炊飯機の第1号機を、昨年度茨城県立歴史館に寄贈いただきました。開発した三並義忠氏の後継会社が風美子氏の出身地である常陸大宮市にあることもあり、茨城で50年間保存されてきたものです。



「自動式電気釜」
東芝製
昭和30年製造
販売価格 4,500円